

ピエール・ブルデュー

対象化する主体の対象化

磯 直樹

慶應義塾大学法学部 日本学術振興会特別研究員

ブルデュー(1930-2002)の『ディスタクシオン』は1979年に刊行されたが、これは彼の著作の中でも社会学者にはおそらく最もよく知られているだろう。同書では、ハビトゥス、資本、界などの有名な概念を駆使した理論的考察が展開されているが、それと切り離されずに社会調査に基づいた分析が行われている。この著者も例に漏れないが、ブルデューは1950年代から1990年代まで、調査を通じて思索を続けた社会学者であった。

20代前半のブルデューが学んだのは哲学であり、パリの高等師範学校においてであった。若き哲学者としてエリートの道を歩み始めたブルデューは、望まずして徴兵され、戦地のアルジェリアに赴く。しかし、ブルデューにとってのアルジェリア経験は、社会学者としての歩みの出発点になったとともに、彼の研究人生においてきわめて重要な意味を持つものになった。彼は兵役が終っても戦争の続くアルジェリアにとどまり、調査を開始する。アルジェリアでの調査は主にアブデルマレク・サヤドと行ったが、二人とも命の危険に晒されながらの仕事であった。この二人の共著が1964年に刊行された『デラシスマン』(1964, Les Éditions de Minuit)である。



「根こぎ」を意味するこの著作の副題は、「アルジェリアにおける伝統的農業の危機」である。本書では、植民地期アルジェリアにおいてフランス当局の行った強制移住などの政策が、いかにアルジェリアの農民から土地と労働だけでなく文化を奪い、彼らを「根こぎ」にしたのかが綿密な質的・量的調査の成果をもって考察されている。

ブルデューは戦争の続くアルジェリアをあとにし、フランスへ戻って社会学者としての道を歩み始める。

1960年代に彼が行った文化活動や教育に関する調査の成果の多くは、独自の理論的展開を経て『ディスタクシオン』に結実する。ブルデューは質問紙調査もインタビュー調査も行い、政府統計も活用しながら、『ディスタクシオン』を執筆した。彼が重視した関係論的思考は、計量分析として多重対応分析を採用することになった。この思考は、諸々の対象同士の関係だけでなく、認識する主体と認識される客体の関係も問おうとする。これは、「対象化する主体の対象化」として、彼が「反省性」と呼ぶものである。

ブルデューは『ディスタクシオン』に続いて1980年に刊行された『実践感覚』の冒頭で、次のように述べる。「認識の進歩は、社会科学の場合、認識の諸条件に関する認識の進歩を前提にしている。これが、同じ対象に繰り返し立ち返ることが求められる理由である」。彼は晩年に編さんされた『独身者たちのダンスパーティ』(邦訳名『結婚戦略』)においても、同じフィールドに繰り返し立ち返ることで反省性を実践していると述べている。反省性は科学をより科学的にし、調査の進展は理論も発展させるが、このように科学的かつ理論的であればあるほど、記述は現実には迫る、と彼は考えた。同書には1960年代から80年代にかけての異なる時期に書かれた3編の論文が収録されている。フィールドはいずれの論文でも同じところで、彼の生まれ故郷のフランス南西部ペアルン地方である。

このように、ブルデューは質的方法と量的方法の両方に依拠して調査を行い、調査を通じて理論的思考を展開させていった。その過程にあったのは、調査を通じて対象化を行う自らに対する反省の積み重ねである。その反省というのは、倫理的態度であると同時に、科学を志向する態度であった。このような調査家の出発点にあったのがアルジェリアでの兵役であり、倫理的かつ政治的に厳しい判断を迫られる戦時中に行った調査であることは、反省性の要請という観点から示唆的であろう。



Column
調査の
達人

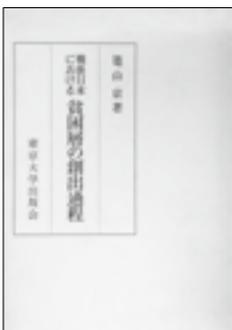
籠山 京

調査研究における事実と人間の現代的再考

小林 甫

北海道大学 名誉教授

籠山^{たかし}先生(1910-1990)は、島原半島の西岸(旧・小浜町、現・雲仙市)に出生、東京で成育して、慶應義塾大学医学部に進んだ。ご尊父は、身体虚弱児童のための施設を経営し、「並大抵でない苦勞」をした。ご自身も「父親の借金のために、とんでもない苦勞を重ね、福祉事業の尊さと厳しさを「身にしみて痛感して」きた。だから「志さえあれば、誰でもできるように」、国の行財政を拡張すべきだと語る(1964年の述懐。『留岡清男先生遺文集』、1981:199-200)。これは籠山先生の原体験であろう。研究面では生理学実験や社会医学調査から出発し、労働衛生学や労働科学、さらに労働問題や教育社会学の、手堅い実証研究を広く積み重ねた。以下では、上智大学時代以降のお仕事に学んでみたい。



① 籠山先生に、「事実は怖い」という言葉がある(『戦後日本における貧困層の創出過程』1976:180)。「私らの分析や解釈に誤りがあったとしても、記録したものは正しく真実である」(同:vii)。この調査は1954年から1975年まで、北海道和寒町^{わっさむ}で、同町を構成する三つの“社会”、すなわち(a)農家、(b)商工自営業者、(c)被用者を対象に、各世帯の家計・経営、家族の出入りを追跡する「生活誌」(ライフ・ヒストリー)調査である。“社会”間に大きな階層移動がないなか、(a)に10の小階層、(b)に2、(c)に3、計15の小階層が存した。“社会”と、(1)貧困層、(2)準貧困層、(3)貧困でない層との関係では、(3)は雇入機械化農家に上昇した層のみ、(1)に家族経営人力農家層、被用者日雇・日雇共稼層が確実に入る。他の階層は貧困層の給源、準貧困層である。「窮乏化法則」が湖北の地を覆った。自治体・農協・学校等の分析はない。

② 『ボランティア・アクション』(籠山京著作集第1巻、1981年)は、足立区本木にあったスラムと、ボランティアーズとに関わる生活誌(モノグラフ)である。「本木のバタヤ部落の解放のきめ手は、未就学児解消にあった」(同:3)。その解消運動は、「子供を一人前の工具に育てあげて巣立たせることになった」(同:175)。この認識は、和寒町では事実把握の枠外であり、ボランティア・アクションと密接な関連がある。籠山先生はそれを、「変革の力」であり(同:3)、かつ「報われる積りでしたことではなかった」行為だと理解する(同:199)。ご尊父などバイオニヤーズは、「人間に対する危機意識」(同:201)を、その行為の根底に置いていたからである。籠山先生も一貫して、人間の“生き死に”を基底に置いていた。それが籠山貧困研究の真髄だと思う。

③ 鈴木榮太郎先生(1894-1966、壱岐出身)と籠山先生とE・トッド氏はP・ル・プレー(1806-1882)を、各自の農村研究、貧困研究、家族システム研究の始祖と見る。トッド氏は人類史を、(1)前近代における有史以来の家族システム、家族的価値の蓄積の段階、(2)識字化、初等教育的教養の普及、家族システムによる民主化・平等化の選択の段階、(3)高等教育の拡大と教育ピラミッドの逆転、社会の分裂、かつ「家族と地域共同体の人類学」、すなわち人類学的基底の甦生、の時代に分ける(トッド『不均衡という病』、邦訳2014:22,309)。籠山先生の和寒調査、本木調査は、(2)から(3)への移行過程を扱い、1981年の編著『大都市における人間構造』は、「地域人間関係の再構成」を提起した。新自由主義以後を含む(3)の時代において、籠山先生の到達点は、トッド氏の人類学的基底性の甦生という現代的関心に重なる。人の生き死にの問題は、世代生(孫の世代との協働)に関与し、また家族システム(米英と異なる直系家族型:独瑞韓日)の組成と変容、社会基底の甦生と全体社会のあり方など、国際的な課題にも連なっているものと思われる。